

犬山祭保存会の活動について

愛知県犬山市 一般社団法人犬山祭保存会

一般社団法人犬山祭保存会会長 石田 芳弘

犬山祭保存会の由来

犬山祭はふるさとの産土針綱神社の例祭であり、現在のような形を整えたのは寛永12年（1635年）といわれ、今年で383回目を数える。

一昨年ユネスコの無形文化遺産となったが、国宝の城と登録文化財の街並みからなる城下町とこの祭の3点セットでまちづくりの大きなブランドとなっている。

木曾川が、山岳連なる岐阜県を下り、濃尾平野にゆったりと視界を開く扇状地に犬山城下町はあり、里山文明の中に町と祭は育まれた。犬山市は昭和の合併で

城下町の犬山町が近隣4町村を吸収するという形で誕生した人口7万5千の自治体である。

13台の車山（やま）と3個の練り物を有する犬山祭は昭和39年愛知県有形民俗文化財となり、県・市からの修理費補助の受け皿として設立した祭関係者の任意団体が犬山祭保存会であった。

政治（まつりごと）と祭（まつりごと）

個人的な経歴になるが、終戦直後の商店街が軒を連ねる中心市街地であった城下町のご真ん中で生まれた私は、犬山祭に生まれ地域コミュニティの中で成長し

ていった。

大学卒業後家業を継いだ。我が国は高度成長期に突入、城下町商店街は櫛の歯が抜けるように寂れていった。

丁度そのころ地元の市長選挙があり、政治のダイナミズムに触発され、その後政治家人生を選択した。

愛知県議会議員になり犬山祭保存会の会長を仰せつかった。政治を「まつりごと」ともいうが、政治と祭が民主主義という視座で結びつき可視化された。

選挙の余談だが、立候補を決意した時、さる先輩からすすめられ、市内すべての神社を必勝祈願に回った。ちなみに全国の神社数8万はコンビニの5万をはるかにしのぎ、神社という存在の身近さ



市長職の経験から

私が市長職に就き、まず意識したのは市民と役所職員を巻き込んだ自治体のガバナンスだった。私は政党政治家の国會議員秘書を経て県議會議員になったため、自治体の町内会やコミュニティ政策

を痛感。明治期、Society（ソサイエティ）を社（やしろ）にて会うという意味で福沢諭吉が「社会」と訳したことなども神社と祭とコミュニティの関係を大きく意識するきっかけとなった。

には正直疎く、自治省（現総務省）の主導するコミュニティ政策を研究しかけたのは市長に就任後のことであった。もともと教育政策には関心があつた。義務教育の設置者は自治体であり、基礎自治体の教育行政は地方自治の実践の場であると考えていたから、ほぼ1万人の住民によって構成する小学校区をコミュニティの単位と想定する自治省のコミュニティ構想に飛びつき、コミュニティセンターを立ち上げ市政の中に取り入れた。子どもたちが歩いて通う小学校のエリアは、住民全体のためのつながりの場

であるというコミュニティ論は誠に腑に落ちた。市長2期目に入った平成13年、名古屋大学の中田実先生を会長に「コミュニティ政策学会」が創設され、私も宝塚市長、三鷹市長とともに実践者の立場として副会長に就任した。しかし、市内でこのコミュニティ政策が必ずしも順調に進んだわけではない。町内会との関係が多少ギクシャクした。コミュニティ論には、行政の下請けのような上意下達の町内会組織から脱却し、市民主体の地域づくりを促す意図があつ



4月の第1土曜日に行われる犬山祭



3層の車山13基が城下町に練り出す



犬山城下町



城下町ひなめぐり機部邸



城下町夏の行事の余遊亭ビールまつり

たのであろう。やや受け身の町内会メンタリテイと主体性のあるコミュニティ組織との意識のずれのようなものが生じ、相互の組織が補完関係になるまで多少時間がかかった。また、犬山祭を実施する町内会組織には祭の持つ内発性を有するゆえにコミュニティ論は不要であることも知った。

一方、21世紀になって「新しい公共」の理念のもと急速にNPO活動の流れが加速してきた。町内会・自治会やコミュニティ政策のような地縁を離れ、個別のテーマごとに組織するアソシエーションの概念である。縦糸（コミュニティ）と

横糸（アソシエーション）のゴブラン織りによるまちづくりに挑戦した。NPOの専門家を助役（現副市長）に招き、NPO支援の中間施設を作り、支援条例を制定、まちづくり関係のNPOも複数立ち上がった。

しかしまた、NPOによる市民活動は市政のイニシアチブの点で市議会との補完関係を構築するのに時間を要することも分かった。

祭保存会を公益法人にする

ここで話を犬山祭に戻す。

犬山祭保存会は祭の車山と練り物を所有する町内から成るから、16町内・1601世帯・3327人の町内会と全く重なる地縁の任意団体である。国指定の文化財である車山の修理費は毎年1000万円以上になるが、ほとんどが公的な助成金で賄うため別会計であり、本会計の祭の運営費は各種助成金も含め1500余万円かかる。すべての住民は自己負担の町内会費から祭の費用の一部を充てるため祭とのつながりはすべての住民の意識にある。一方、祭に関係する城下町界隈は、少子高齢化に伴う人口減・社会の多様化などかつての祭を維持する

自力は衰退気味であり、祭の担い手は関係町内以外からの助けを必要としてきた。いわば、地縁による「コミュニティ」と祭というテーマを求める「ソサイエテイ」が混在する現象が徐々に進んできた。さらに、犬山祭がユネスコの無形文化遺産になって気づいたことだが、祭を持続するライフスタイルの維持こそが遺産なのだという視点だ。

そこで、犬山祭保存会は今年から地縁中心の任意団体から地縁を超えた公益法人に移行することにした。

しかし、前途は容易ではないだろう。地縁による求心力をたわめ、「よそ者」を歓迎することはこれまたコミュニティ本来のパワーを失うことにもなりかねないからだ。

一般社団法人・犬山祭保存会のビジョンは「犬山祭を通して地域コミュニティをつなぐ・ひきつぐ・ささえる」を掲げた。ここにはコミュニティと、祭というテーマを持つソサイエテイの両理念が同居していると考ええる。

強い地縁意識の残る犬山城下町の閉鎖意識の壁は厚いかもしいれないが、私は祭保存会の会長として強い意識でコミュニティとソサイエテイの融合に挑戦してみたい。